氏　名（本籍）	飯　野　篤（いいの　あつし）
学位の種類	医　学　博　士
学位記番号	医　博　第　624　号
学位授与年月日	昭和45年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
研究科専門課程	東北大学大学院医学研究科 （博士課程）内科学系専攻
学位論文題目	じん肺結核症の治療に関する研究

（主　査）

論文審査委員　教授　中　村　　隆　教授　岡　　捨　巳

教授　鈴　木　千賀志

論　文　内　容　要　旨

昭和３０年１月より４２年１２月までの１３年間に６ケ月以上珪肺労災病院に入院したじん肺結核症３７８例の治療成績を種々の角度より検討し，じん肺結核症と肺結核の相異を明らかにすると共に，じん肺結核症の治療に当り留意すべき諸点を考察した。

対象例の職種別症例数は，金属鉱山坑内夫１１５例，炭坑坑内夫１５例，隧道坑内夫１４例，石工１１８例，その他（研磨工，硝子工，……）５７例及び２職種以上の粉じん作業に従事した者５９例である。

以下主な研究項目について述べる。すなわち，

(1)珪肺結核症を中心としたじん肺結核症３７８例の治療成績

じん肺結核症３７８例の基本病変，空洞及び結核菌の経過より総合経過判定した成績について検討した。

(2)治療効果に及ぼす諸因子

じん肺結核症の治療効果に影響を及ぼすと考えられる諸因子のうち，以下の因子について検討した。すなわち，

a　化学療法の種類――対症療法のみ，一剤投与，二者併用，三者併用，多剤投与，クルクル療法及び長期プレドニゾン投与について。

b　胸部Ｘ線写真所見――基礎じん肺，病巣の性状，空洞の有無及びその性状，病巣の拡がり，附加記載事項について。

c　排菌の有無

d　その他　　職種，年令，初回治療と再治療，入院期間について。

(3)じん肺結核症と肺結核の化学療法成績の比較

じん肺結核症３７８例中初回治療で，しかも最初の６ケ月間二者あるいはＳＭ＋ＰＡＳ＋ＩＮＡの三者併用の行われた６ケ月后の治療成績と肺結核のそれとを比較検討した。

(4)悪化例における悪化形式

総合経過より悪化と判定された８８例の悪化形式を，胸部Ｘ線写真上の病巣の部位及びその変化，空洞の経過，排菌の経過等の面より検討した。

(5)Ｓｏｆｔ　Ｎｏｄｕｌａｔｉｏｎ（以下ＳＮ）及び塊状型（以下ＭＴ）の臨床的意義

じん肺結核症特有なＳＮやＭＴにつき，それらがじん肺結核症の治療上に占める臨床的意義について検討した。

a　ＳＮ――入院時より観察された８１例及び入院治療中に出現した７例のＳＮの部位，出現形式，経過，経過と観察期間，経過と総合経過判定について。

b　ＭＴ――入院時すでに存在した４２例のＭＴの経過，経過と観察期間，職種や基礎じん肺との関係について。

成　　績

じん肺結核症３７８例の治療成績は著明軽快８例（２.１％），中等度軽快１０例（２.６％），軽度軽快６９例（１８.３％），不変２０３例（５３.７％），悪化８８例（２３.３％）で不変例が大半を占めた。初回治療例にＳＭ＋ＰＡＳ＋ＩＮＨを投与した最初の６ケ月后の治療成績と肺結核のそれとを比較すると，じん肺結核症の治療成績が著しく悪い事実からみても，肺結核と同一視することとは出来ない。また，空洞の改善が１０４例中わずか１８例にみられたにすぎず，きわめて改善しがたいものであるから，感染源になり得ると考えられる空洞を有するじん肺結核病巣に対する外科的治療は，肺結核の治療におけるそれよりも一そう重要である。

じん肺結核症の化学療法は「結核の治療指針」に準じて来たが，基礎じん肺が３型以上，病巣の拡がりが２以上，ＳＮの存在，空洞の存在，菌陽性などのみられる症例は，初回治療と言えども充分な化学療法，また慎重な治療方針が必要である。

じん肺結核症は充分な抗結核剤投与のもとに長期間の治療を必要とする。というのも学研分類のＣＣ型やＭＴと記載される硬化病巣ですら活動性病巣に変化することがあるので，これらの症例にも最少限の抗結核剤の投与持続と経過観察が必要であり，もし増悪の徴がみられた時は直ちに強力な化学療法が出来るよう心掛けていなければならない。

化学療法に対する反応のテンポが遅いじん肺結核症で，排菌のない症例の経過を観察し，現在の治療効果を確かめるために学研あるいはその他の病型分類にて表現される病巣の変化に注意することは勿論であるが，比較的変化を観察しやすい貴重な所見としてのＳＮにも充分注目する必要がある。更に結合型結核病巣と言われているＳＮでも改善がみられることより，じん肺結核症の初期治療，特にＳＮを観察した時期における有効適切な化学療法が必要である。

また，じん肺結核症においては結核に対する治療ばかりでなく，症例の多くは高令者，低心肺機能者であり，気管支炎その他の感染症を合併するものも多いので，入院による一般状態の管理も大切である。

審　査　結　果　の　要　旨

肺結核の治療に関しては，従来詳細な研究が多数報告されているにもかかわらず，じん肺結核症の治療に関する詳細な研究報告は比較的少なく，特に３７８症例もの多数例について種々の角度より検討した報告はない。著者が緒言で述べているように，じん肺結核症と肺結核を退院時あるいは初回治療例の二者併用や三者併用６ケ月後の治療成績を綜合判定および症状経過判定（基本病変・空洞・排菌）にて比較し，その相異を明らかにすると共に，じん肺結核の治療あるいは治療に当り留意すべき諸点を明らかにした。

一方，じん肺結核症特有といわれている塊状型（ＭＴ）や Soft Nodulation(S.N.) を臨床上注意深く観察し，それらが臨床上どのような意義を有するものか明らかにした。

以上のように，この論文はじん肺結核症に対する現在までの治療方針をまとめ，また現在の治療はどうあるべきか述べたもので，更に，このデータが，今後のじん肺結核症の治療方針の土台となるものとして意義あるものと思われ，充分学位授与に値するものと認めた。